いはん方なく恐しければ、皆一まどゐにまどゐし、或は打臥などしてあるに、燈火をさへゆり消し、又は倒などしければ、女童は泣まどひ、たゞ神佛の御名を唱ふるより外なし、漸く明がた近くなりて、少し穩しく成ぬるにぞ、人々生出たる心地せしに、又強く震ひなどして、朝の五ツ時迄に、およそ三十五六度に及べり、あくる十五日もきのふに替らず空晴たりしかど、猶ふるひやまずして、暮るゝまで長短強弱はあれど、十五六度に及びぬ、○下略

〔地震日記〕十一月○安政元年四日、辰ノ下刻地震フ、同夜二度ハ微細ナリ、○中略

五日、○中略同夜震コト七十度、寒強ク霜大ニ降、○中略

六日、震フコト四十五度、晝ハ温ニシテ夜ハ寒シ、寒暖モ甚超過セリ、以來十日過マデ同ジ、晝二十一度、午時一度強シ、夜二十四度、亥ノ刻太ダ長シ、○中略

七日、震スルコト五十三度、晝暖夜寒シ、晝二十四度、四ツ時太ダ長シ、夜二十七度、八ツ時太シ、○中略

八日、震フコト四十一度、晝暖ナリ、震勢漸ニ弱小ナリ、晝十六度、二度強シ、夜二十五度以上、○下略

〔宇野主水記〕一去年○天正十三年十一月ノ大地震ヨリオリ〳〵不止、大晦日之時分マデ節々ユリタル也、當春正月十二日ニモユリタル也、御堂御通夜聽聞之間ニモユリタル也、○中略

一廿日○二月朝六時分地震、舊冬ヨリ于今不止、

〔三災錄上〕谷脇茂實日記に云○中略

一去冬○嘉永七年卽安政元年十一月四日ゟ地震度數の覺を、鷹匠町水門の御番人喜久助七十五歳が記せし物を見しに、日々夜々大震中震小震を分ちて委敷ものして、實に繁なるもの也、又月々の末には、其員數を縮たれば、夫のみを取て左に出す、

一去十一月分　合貳百四十七度　〆大七度、中四十四、小九十六、

一同十二月分　合九拾六度　〆大三、中貳拾、小七十三、

地震越年